

<実践哲学としての「コミュニティ・デザイン論研究」を目指して>

2nd フレーム「How? 計画」ワーキング

B. 話題提供 (異世代・異分野の視点から)※

話題提供者:

山口洋典 (立命館大学共通教育推進機構教授)



「地域参加を通じた学びのコミュニティづくりに携わって  
～教育災害や学習災害をもたらさないように～」

### 1. 「物語・設計」の科学へ

高田光雄先生の話提供 (2nd フレーム\_B) でふれられた、1976年5月の雑誌「建築文化」355号でのコミュニティ・デザインの特集のお話は、2022年度のコミュニティ・デザイン論研究の授業内で私が担当した回で紹介させていただきました。ご指摘のとおり、ハード中心の議論が並んでいたことをよく覚えています。そして、論文データベースの CiNii Research での検索結果では、私たちが扱っている意味での一番古いコミュニティ・デザインの論文は、この号に収められた論文が該当すると捉えています。

こうしてコミュニティ・デザインはハード寄りの議論から始まったように、私も土木工学でのハード面から都市や地域に関心を向けていきました。それが一変したのが阪神・淡路大震災です。特に震災ボランティア活動が、当時の学生に影響をもたらしたことは、朝日新聞が発行している雑誌「AERA」の1995年の2月20日号の記事のタイトル「君は神戸に行ったか」が象徴的に表しているでしょう。当時はJRの新快速電車が芦屋駅まで運転再開になった頃で、私は京都から芦屋に頻繁に通って活動をしていました。

私は現地を往復する列車の吊り広告で、この「君は神戸に行ったか」の文字を目にしました。ただ、この記事には副題に「指示待ち学生が変わる」とあることに、時を経て気づきました。そして、確かに指示待ちではなく臨機応変に動いていたという実感がこみあげてきました。私は立命館大学理工学部環境システム工学科に、いわゆる不本意入学で進学していて、特に専門分野の授業にはあまり身が入らず、入学してからもしばらくは第一志望だった筑波大学への思いを断ち切れずにいました。

ただ、徐々に今の大学生活に意味を見いださないと、自分の選択を否定するだけになってしまおうと思い、大学の掲示板で募集されていた立命館大学で開かれる国際会議「第3回アジア太平洋 NGO 環境会議」の学生スタッフに応募しました。そこで出会った仲間と気があって、結果として一緒に震災ボランティアのためのセンターを立ち上げる活動することになりました。運営スタッフをとりまとめたのは、後に一緒に数々の場を共にする同級生の内山博史くんで、今は結婚して石川県に拠点を置いている谷内博史さんです。

谷内さんはコミュニティ・デザイン論のゲストに何度もお越しいただいていますが、私の震災当時の活動での経験を、2014年1月17日にNHK名古屋放送局制作の「ウィークエンド中部」という番組で放送いただきました。後半では渥美公秀先生が出てきます。

—映像「震災から14年 いのちと向き合う」上映—

これは震災から14年を迎える際、当時はNHK 静岡放送局におられた別井敬之アナウンサーに大阪・天王寺の浄土宗應徳院に来ていただいてインタビューに応えたものです。6分ほどの映像では、私が神戸で出会った「ばあさんが亡くなったところで私も死ぬんだ」というおじいさんの語りに特に焦点が当てられました。この言葉は土木を専攻していた私にとって、支援者として抱いていた万能感を根本から打ち砕くものとなりました。今となれば、ちょうど重症の患者さんが救急車で運ばれてきた際にチーム医療で知識やスキルなどを役立てるように、周りの先生方が異様なまでの高揚感で調査や議論していた理由が理解できるのですが、当時は人の悲しみにきちんと向き合っているのか、そもそも人の不幸を喜んでいるのではないか、そんな思いにさえ浸ったんです。

震災だけでなく、安全・安心なまちづくりという名目でジェントリフィケーションと呼ばれる現象が起きていることも徐々に知りました。それは個人の不幸を横に置いて社会の幸せを導くといった感じで、公共善には必要悪があることを前提にしているような印象を抱きました。そんな私が最ももやもやしたのは、まちづくりに正解はないはずなのに、工学は正解を追求する学問であり、追試可能性や再現性や普遍性が問われることでした。

今でこそ、こうして言葉にできていますが、そのもやもやを2001年の3月に中国の内モンゴル自治区に学生らを引率した際に深く考え、縁あって大阪大学の門をたたきました。そして職場の研修制度を利用して、2002年の4月から渥美先生の指導を頂き、2005年3月の修了まで社会人大学院生となりました。

このときに私は専門を社会心理学、具体的にはグループ・ダイナミクスに変えるのですが、当時の職場（大学コンソーシアム京都）の理解もあって、出勤・退勤時間を柔軟に取り扱っていただけのため、学部の授業も聴講させてもらいました。また「アナトミア社会心理学」の輪読会に参加するなどして、心理学の基礎を体系的に学ぶことができました。

なぜ大阪大学の人間科学研究科だったか、それは指導いただく渥美先生がおられたのがボランティアという名前を掲げた「ボランティア人間科学講座」だったことに魅力を感じたからです。入学直後に自分の研究計画を発表する「CAMPUR（チャンプール）」という合宿の冊子を今も残しているのですが、そこには「市民の視点を重視し学際的なアプローチで研究や教育を進めていくことを目的としている」とあります。高田先生が学際という言葉で語られたように、人間科学もまた学際的なアプローチで社会問題が取り扱われていました。中でもボランティア人間科学講座では、母子手帳をアジアに広める人、外国籍の子どもたちの学習支援をする人、犬を通じた心のケアをしている人、そして多彩な実践を通じて研究する人たちが同じ講座にいることを、まずは合宿で知り、その後は共同研究室で交流することになりました。専門分野もテーマもばらばらながらも、むしろばらばらだからこそ、より良い社会をつくっていくために切磋琢磨する仲間になれる気がしました。3年間は「知的刺激をシャワーのように浴び」、あっと言う間に過ぎた印象です。

そして、大阪大学に在籍したことで、私は大阪のまちに関わっていくきっかけを得ました。それが、先ほど高田先生がおっしゃった上町台地との関わりでした。大阪出身の、そして大阪大学の渥美先生が上町台地境界での取り組みに関わることになり、私もその会議にオブザーバーで参加させていただくことになったのです。

## 2. 都市と農村、それぞれでの計画への視点

上町台地との関わりは、阪神・淡路大震災のもやもやから時を経て、10 数年と経つ中で、大阪ガス CEL の協力を得て 2009 年に刊行された『地域を活かすつながりのデザイン』という書籍で、人と人が出会い、関わり、つながっていくプロセスをどうデザインするかを記させていただきました。土木工学での研究方法に戸惑いはあったものの、都市計画には興味を持ち続けていたため、そこへの学際的なアプローチを示せた感覚があります。

ちなみに、この本の第 2 章では渥美先生による学問の 4 分類が紹介されています。防災や減災には複数の学問からの接近が重要であり、かつ学問の周辺にある芸術や哲学や宗教、さらには日常生活そのものが大事だと示す図解なのですが、ここでの学問の 4 分類は、研究の志向性とその成果の特性の 2 軸で区別されるというもので、志向性については未知の事柄を分かりたい認識科学と社会を良くしたい設計科学に、成果については時代や場所を越えてユニバーサルに通用する解を探求する法則科学と問いを問い直しながら現場に根ざすローカルな知を追求する物語科学に、それぞれ分けられています。これは社会学者の吉田民人先生による「プログラム科学論」などを基に整理されたものです。

ちなみに私は設計科学かつ法則科学である土木工学を流儀としてきたのですが、震災ボランティアの現場で呼び覚まされた正解のない物語科学への関心がより高まっていました。その後、大学コンソーシアム京都での仕事をしながら、渥美先生のもとで設計科学かつ物語科学としてのグループ・ダイナミクスを学び、職員研修制度のもと大学院に行くチャンスを得た当時の事務局長をはじめ、職場や地域への恩返しをと思っていました。ただ、大学院修了後に職場の体制や事業方針が変わり、一言で言えば仕事への情熱を失いかけていました。それを救ってくれたのが、当時は同僚だった川中大輔先生です。

大学院修了を前後して、弘本さんにコーディネートをいただき、大阪ガス CEL からの委託研究を担わせていただいたこともあり、産学連携の窓口機能であるリエゾン・オフィスの業務を継続して担当できました。それにより、デスクワークに重点を置く方針となったものの、川中先生とまちに出てローカルな知を追い求めることができた、という具合です。

卒論や修論の際に苦労した、実践的研究の成果をどう明らかにして示せばいいか、そもそも現場の科学をどう展開していくか、そのための姿勢や方法論を「上町台地からまちを考える会」での取り組みを博士論文にまとめる過程と、大阪ガス CEL から大学コンソーシアム京都への委託研究に携わる経験を通じて研ぎ澄ますことができました。実際、博士論文では「まちづくりは一人ではできない」という着想から、長縄跳びを比喻に用いて、さらに社会学的身体論から規範の重複構造と多層構造との区別のもと、コミュニケーションのあり方を分析していくことにしました。

『地域を活かすつながりのデザイン』の第 6 章では、その要約を収めていただいています。都心部では規範が入り混じり、誰かが何かを変えれば雰囲気が変わっていきます。規範とは英語で norm、ノルムと呼ばれるのですが、カタカナでノーマルと言われる言葉と語源が同じです。自分にとって普通だと思うこと、妥当と捉える価値判断が、一人一人が意図しているかいないかにかかわらず、他者の振る舞いに影響を与えていくのが都市の動態です。一方で農村部では、一人一人の動きや他者との相互作用よりも、集団の秩序が大事にされ、それぞれの生き方は地域で脈々と継承されてきた文化に影響されます。そのため、一人が一気に変えようと思っても変えられないものの、手続きさえ間違えなかつたら地域

全体を包み込む雰囲気を変えていくこともできるでしょう。

ここで重要なことは、都心部でも農村部でも「まちづくりは一人ではできない」ことで、パートナーと共に自己完結しないように留意する必要があります。その際、自分たちが「これでいい」と納得できる水準で取り組むという意味での自己満足は大事ですが、それが自己完結しないように、地域内での丁寧なコミュニケーションが欠かせません。そのため、第6章ではリーダーとフォロワーの関係をうまく調整すること、などと述べています。

ただ、出版された2009年から時間が経過する中、先ほどの高田先生の話に引き付けられれば、小さな都市計画のもとでコミュニティ・デザインが注目される上では人口問題と関連づけられているというのが私の見立てです。ただ、人口問題だけに着目すると、パイの奪い合いになってしまいます。実際、地域の魅力づくりでは、「〇〇人口」という呼び名が、工夫の上で複数使われているのではないのでしょうか。

既に移住促進による定住人口の増加だけでなく、二地点居住や観光客など住まないけれども地域を訪れる人々を交流人口と位置づけて魅力を創出していこうという動きがあります。また、住むか住まないかを基準とせず、地域と交流した人たちが継続的に関心を寄せるという意味で関係人口という観点が出てきました。ふるさと納税をはじめ、まちに魅力を感じる人が関わり合う関係人口の増加は、雑誌「ソトコト」で何度も特集されています。

そこに活動人口という話も出てきました。これはむしろ地域外よりも地域内に焦点を当て、ただ住んでいるだけでなく、住みながらアクティブになっていく人が大事という議論です。後ほどお話ししますが、コミュニティ・デザインを広げた山崎亮さんの博士論文を中心にした2016年の本『縮充する日本「参加」が創り出す人口減少社会の希望』に、この「活動人口」という言葉が出ています。

ちなみに交流人口は1994年に旧国土庁の計画・調整局が「その地域を訪れる(交流する)人のこと」と定義しています。関係人口は、2016年に「ソトコト」が「地域に関わってくれる人口のこと。自分でお気に入りの地域に週末ごとに通ってくれたり、頻繁に通わなくても何らかの形でその地域を応援してくれるような人たち」として使い始めました。

そして活動人口は、日本総研が2004年に「職業の有無に拘らず、『社会的・生産的活動』を行っている人口」した後、山崎亮さんが2016年の本で「労働力を供給する『経済活動人口』とは異なる。むしろ『市民活動人口』といった意味合い」と定義しています。この2つは住んでいるだけではなく何かというところは共通するのですが、私は人口の数だけではなく地域の質を問う点で、山崎さんによる「市民活動人口」という意味合いにシンパシーを抱いています。そうした感覚には山崎さんと同世代であることや、いくつかの場を一緒にしてきたことも影響しているでしょう。ただし、それだけではなく、日本総研が言う活動人口では、地域の人々がアクティブになる目的が経済活動として地域を活性化することとなるため、活性化の指標は経済だけではないだろうという違和感が拭えずにいます。

ここで渥美先生から教えていただいた、明治大学の小田切徳美先生による『農山村は消滅しない』という本にも触れさせてください。この議論は農山村というくくりだけでなく、大阪市内の平野郷など、独自の自治の仕組みが根ざしてきたまちに通用すると言った方がいいかもしれません。小田切先生は地域づくりには新しい価値の上乗せが必要で、数的に存続不可能と判定できたとしても、足し算的な寄り添い型での支援ではなく、事業導入型での掛け算的な関係構築ができれば、「逆臨界点」と呼べるような状況がもたらされると示

しています。ヒト・モノ・カネという量的な地域資源の拡大を善とするだけでなく、積極的な情報交流で発想や人脈を拡張し、それらを活かすことが鍵になるということでしょう。

以上の議論を踏まえて、改めて2冊の本を基に、私なりの計画というテーマに対する姿勢を示させてください。1冊目は、2014年の塩崎賢明先生による『復興〈災害〉——阪神・淡路大震災と東日本大震災』です。復興という名の災害が被災者を追いつめる。2022年度の同志社大学での授業にゲストでお招きした松永永季さんと前田昌弘先生が紹介された神戸市長田区の事例が象徴的です。2カ月で策定された計画にしばられ、しかし計画の着手から遂行までに時間がかかり、25年が経過しても計画が完了しないまま、時が流れました。災害復興では「待ってください」という言葉が被災された方々にはつらく、重くのしかかります。だからこそ計画策定を急いだのかもしれませんが、いったん計画が決まってしまうと、そのシナリオから外れるものは認められず、しかも待たされることも多くなります。

この『復興〈災害〉』という本の前書きに出てくるのが、1980年にイギリスの地理学者であるPeter Hallの本『Great Planning Disasters』です。大計画による災害と言ったらいいでしょうか。ピーター・ホールの著作は、創造都市論の佐々木雅幸先生が2019年から2022年にかけて「都市と文明」の3部作の日本語訳を出されましたが、それとは別の本です。

いずれも計画災害、つまり今よりより良い社会を展望している方の思いが、結果としてまちに響かないとを批判するものです。そしてそれは古くから指摘されてきた点です。

この指摘を今日、私が掲げた大きなテーマ「地域参加を通じた学びのコミュニティづくりに携わって」に重ねますと、教育を御旗にした現場の災害を減らすことができるよう、プログラムを設計しています。今の仕事は学生が現場での活動を通じて学習する場づくりのため、「学生たちがお世話になります」と、地域の方々に受入をお願いしています。結果として、学生たちが迷惑をかけつつも、人が育ち、まちも変わっていくのですが、地域の日常に学生が関わる上で現場が非常時にならないように、つまりは教育災害や学習災害と呼ばれる状態は回避しなければという思いを持っている、というお話を準備してきました。

### 3. 環境教育への着目から教育環境のデザインへ

そもそも私が土木工学から社会心理学へと比較的スムーズに専門が移行できたと思えている理由は、高田先生が示されたハードとソフトの対比だけではなく、構造と状況の関係に変わらず着目してきたから、捉えています。それは空間計画ではスケルトンとインフィルの関係に対応するのかもしれませんが、まちに人が関わる上では、そのまちの構造に対して一人一人が置かれた状況が制約ではなく前提となる、という見方です。社会をより良くするときには、何らかのプログラムを仕掛ける際のシチュエーションをうまくアレンジしていく、つまりハードよりもソフト、構造ではなく状況を変えるという具合で工夫をしてきたという実感があります。

ちなみに私は土木工学の中でも図面を引いて都市計画する研究室には行きませんでした。その思いを強くしたのが2回生のとき、教職課程を取っていたために受講した「道德教育の研究」という授業での学びでした。現在は同志社大学教授の中川吉晴先生がご担当で、非常勤で来られていたんです。それが大変印象的な授業で、ブタのいる教室などの事例を紹介した回や、黙想を取り入れた回もありました。

一風変わった授業だったのは、『ホリスティック教育 いのちのつながりを求めて』とい

う John P. Miller の本の訳者の 1 人が担当の中川吉晴先生だったからでしょう。教科書に指定されていたものの「高いから買わなくてもいい」などとお話されていたのですが、進んで購入し、授業の展開が興味深かったのもあって土木の専門書よりも興味深く読んだ記憶があります。何より理工学部では「道德教育の研究」は教職課程の中でも必修ではなかったため、授業を取っていた人は少なく、しかも出席も取らない授業だったので、試験前には何人かから私の講義ノートをコピーさせて欲しいと求められた思い出があります。

特に土木系の人たちには、教職課程はほぼ無価値だと思われていました。というのも、土木系で取れる免許は、つまり私が取れた免許は高校の工業という科目だけだったためです。その上、これは戦後にできた科目のため、特例で教育実習に行かなくても取れる規定が当時でも残っていました。人生の選択肢が広がれば、と受講した教職課程でしたが、この授業が結果として研究室選択に、さらに今の仕事や暮らしにも大きく影響しました。

そうした中で所属したのは景観計画研究室でした。景観計画では価値を扱うため、住民参加を前提にしている、まちづくりにおける合意形成をテーマにする研究室でした。指導教員は風景学の名著『風景学入門』の著者で知られる中村良夫先生のお弟子さんの笹谷康之先生でした。私が入った頃は京都府北部の丹後半島にある「地球デザインスクール」で、後の「京都府立丹後海と星の見える丘公園」の計画づくりのフィールドワークをされました。ゼミ合宿では炭焼き体験をし、夜は新鮮な海の幸を食べて、その後はギターで歌って盛り上がるなどしました。

フィールドを重視する研究室のために現場に出ていくことに楽しみを覚える中、卒業研究では市民参加の方法論を扱っていきました。卒論のテーマは、気候フォーラムという NGO が地球温暖化防止京都会議でどこまで市民参加を促すか、それらに参加した人々にどのような環境教育の効果がもたらされるか、でした。私は当初はボランティアで、1997年4月以降はインターンとして気候フォーラムの事務局に参加しました。国連の会議ということで、会期が近づくにつれて徐々に世間の関心が高まっていったことをよく覚えています。また、本会議場にも足を運び、ボランティアが開発途上国の政府代表団に折り鶴を配って先進国への働きかけをして欲しい、というアピール場面の参与観察などを行いました。

こうして私はボランティアや NGO や NPO の世界に触れていくのですが、まだ NPO 法ができる前の時代だったこともあって、市民活動の定義にこだわっていました。市民とは誰だろう、住民運動とは何が違うのだろう、といった具合です。今では学問の4分類のように軸を定めて、住民運動（目標が明確・担い手を固める）と市民運動（目標が明確・担い手を広げる）と住民活動（内容が明確・担い手を固める）と市民活動（内容が明確・担い手を広げる）の四つに分けて整理しています。当時はこうした整理まではできませんでしたが、世界の国々や首相官邸などに働きかけていく市民活動の動きに社会を変える可能性を感じました。そこで、担い手を広げて活動を自己目的化せず何らかの目標を達成する、そうした集団の在り方が今後大事になることを卒論で扱いました。

修論はコミュニティ・デザイン論でも紹介してきた地域通貨おうみのアクションリサーチです。冒頭で触れた内山くんたちと滋賀県草津市で取り組んだもので、2014年の講義内容を基にした『「コミュニティ・デザイン論研究」読本』で改めてまとめる機会を得ました。

このときには、コーネル大学で知られるアメリカ・ニューヨーク州のイサカ市に行き、Ithaca HOURS を比較研究の対象にしています。「Hometown Money: How to Enrich Your

Community with Local Currency」という地域通貨の手引きも入手し、仕掛け人の Paul Grover さんにもお目にかかりました。今で言うソーシャル・キャピタルですが、地域を豊かにするには、経済的な面だけではなく、人のつながりが鍵になると修論で示し、そのための仕組みづくりを仕事にできればと思って、働きはじめたのが大学コンソーシアム京都でした。

修論とあわせて取り組んだのが、きょうと NPO センターの立ち上げです。そこでは関西だけでなく全国にネットワークが広がりました。中でも、せんだい・みやぎ NPO センターの加藤哲夫さんは常に鮮やかな言葉で語られていたので、一方的に慕っていたのですが、ある日、その加藤さんから「新川達郎先生が京都に行くから、ぜひつなぎとめておくように」と指示が参りました。東北大学から同志社大学に移られるとのことだったんです。

そこで、大学コンソーシアム京都の「NPO スクール」というプロジェクトに新川先生にも加わっていただくことをお願いしました。プロジェクトリーダーは中村正先生で、立命館大学の産業社会学部のご所属です。中村先生は「阪神・淡路大震災のときに、UC バークレーで学外研究に行っていて震災当時を知らないから、その話を聞かせてほしい」と、ヒアリングの機会をいただいたのが最初の出会いでした。「ボランティア元年」とも呼ばれた神戸でのボランティアたちが、どう地域や社会に関わっていくのかに関心を抱いておられ、NPO でインターンシップをするという制度を NPO スクールとして作り上げた方です。

中村先生は UC バークレーに滞在中、非暴力のワークショップ、特に男性性のもたらす社会への悪影響についてインターンシップをされ、その経験が NPO スクールにつながりました。インターンシップは学生の学習法の 1 つで、特にカリフォルニアでは年齢や国籍を問わず多様な学生がいることから、ご自身もインターンをされたそうです。そして帰国後、日本で NPO でのインターンシップを広げようと、震災ボランティアの流れをうまくつなげようとした、という具合です。私も実践の意義を説くだけでは駄目だと感じていたので、NPO インターンシップの効果を整理するなどで貢献させていただきました。

NPO スクールは 1998 年度から開講されたのですが、新川先生にご参加いただいたのは 1999 年度です。ちょうど阪神・淡路大震災から 5 年を迎える時期で、兵庫県や神戸都市問題研究所などがコミュニティ・ビジネスという概念を押し出していた時期でした。そこで、NPO スクールの枠組みを、ボランティア体験を入りに、どっぷり現場に関わるインターン、現場での学びを深掘りして何かを始めるコミュニティ・ビジネスと、3 層構造に拡張して、今もご一緒させていただいている皆さんとお仕事していた時期がありました。

そのような中で、2006 年に大きな転機が訪れました。誘っていただいた應典院に身を委ねることにしたことと、その決断をした直後に新川先生から同志社でのお仕事に声をかけていただいたことです。この頃の應典院は文化人類学者の上田紀行先生が 2004 年の『がんばれ仏教!』という本で「應典院の特徴は、とにかく日本でいちばん、若い人たちが集まる寺だということだ」と紹介され、広く世間から注目されるようになっていました。加えて、この本でも触れられているのですが、劇場寺院としての應典院に再建を牽引された秋田光彦主幹が大病をされました。秋田主幹と私は 2001 年に NPO スクールの受入団体と事務局という関係で出会っており、2004 年からは「上町台地からまちを考える会」の代表理事と事務局長としてご縁を深めていました。そこで、今後のお寺の運営体制を検討する中で、息子さんが継承を考える間、いわば中継ぎとして関わりを期待いただきました。

2006 年から 10 年間、應典院に身を置く中で、博士論文のフィールドが上町台地だった

こともあって、実践を言葉にすることに力を入れました。例えば應典院の特質をコラボレーション、イノベーション、コーディネーションと韻を踏んで整理しました。また、再建10年を迎える時期だったこともあって、埋もれた資源の発掘を試みたところ、安藤新樹さんによる2003年の写真展の際に outenin とローマ字表記にしたロゴマークを提案いただいていたことがわかりました。そこで、安藤さんに使用許可をお願いしたところ、ご快諾の上で微妙に修正を加えたものを再提案いただきました。そこで当初案を宗教法人としての應典院に、新規にアレンジいただいたものを NPO としての應典院寺町倶楽部に、それぞれに使うことで両者の関係を区別して語りやすくするようにしました。

そもそも應典院は1614年創建の宗教的な拠点を、1997年の再建時に市民活動による創造的な施設として開く方針を定めています。1996年には建築史や都市計画が専門の橋爪紳也さんを座長に『應典院コンセプトブック』をまとめており、その前書きには「どこに転がるのか風まかせではなく、新しい都市の文化装置というテーマを実現していく」というコンセプトが明確にされています。こうした理念のもと、実現のための具体的な計画は時間軸に沿って示されることはなく、事業のビジョンとして掲げられた「学び・気づき・遊び」の場づくりをミッションに、幾つかのコミュニティ・デザインに関わってきました。

振り返ると、應典院では広い意味での環境教育に取り組んでいたように思います。それはホリスティック教育に土木工学を学ぶ中で出会い、人が育つ教育環境は学校以外に無数にあることに気づき、應典院でその場づくりに携わった実感から来ているのでしょう。

#### 4. 「よりよく」することの難しさ

自分史を語ってきましたが、今していることもお話させてください。変わらず「よりよく」する設計科学の立場で幾つかのプロジェクトに携わっています。高田先生のお話に重ねるなら、新潟・小千谷の集落復興の事例の方がいいかもしれませんが、今回は福島県楢葉町のお話にさせてください。

私は今、立命館大学の共通教育推進機構に所属しており、16学部が3キャンパスで展開しているカリキュラムのあいだをつなぐ、のしりろをつくる、もしくは横やりを入れる部門にいます。特にサービス・ラーニングという、大学と地域社会を往復しながら学ぶ教育法で授業や課外活動の設計や評価に携わっています。サービス・ラーニングは、1920年代にジョン・デューイが示した理論などを下敷きにしたもので、1980年代に大学進学率が高くなったアメリカで、学生たちが頭でっかちになることが危惧されたことで構築されました。全米の学長ネットワークである Campus Compact が旗振り役となったことで知られており、連邦政府も積極的に支援したことで各地に広がっていきました。

日本では「ボランティア元年」を経て改めて着目されるようになり、まだ文部省の時代、1997年に兵庫県立大学の佐々木正道先生を中心に、渥美先生もメンバーに入った調査チームが組織されました。その報告は内外学生センターにより「大学とボランティア」という書籍にまとめられています。

こうした動きと並行して立命館大学では1999年から産業社会学部が社会人にも開放した「ボランティアコーディネーター養成プログラム」を実施しており、その実績をもとに2004年にボランティアセンターが設置されることになりました。この頃、省庁再編の結果で生まれた文部科学省は大学向けに補助金などを一律で交付する方針から、公募型の競争



的資金へと制度改革が進められました。まずは研究分野から始まり、教育分野、そして社会貢献分野とどんどん広がってきていました。立命館大学もいくつかのプログラムに応募し、そのうちの1つが現代的教育ニーズ取組支援プログラムに2005年に採択されたサービス・ラーニングをテーマにしたものです。これにより、「地域活性化ボランティア」という地域参加型の授業が2006年から始まりました。

立命館大学では8年に1回カリキュラム改革がなされます。私は2011年に同志社大学から立命館大学に移ったのですが、2012年の改革検討チームに入ることとなり、2006年から続いてきた科目名を「シチズンシップ・スタディーズ」に変えました。理由はこれまでの科目名の「地域活性化ボランティア」という言葉の響きをもたらす、「ボランティアに何で単位をあげるのか」という否定的な声に向き合うためでした。ただ、その本質は変わることなく、市民の生活の中で模範的な知識・技能・態度を習得するという生き方、働き方へつながる実践的な学びのプログラムです。「ボランティアだけど奉仕活動じゃない。授業だけど講義じゃない。それがサービスラーニング！」とパンフレットにも書いてあります。

私の話は比喻が多いのですが、この科目で体験する現場での学びは氷山の一角ではなく、流水のようだ、と語ってきました。流水は遠くから見るときれいですが、その上に乗ると不安定です。なので、学生がうまく立ち回れるようにと、授業を設計しています。

ただ、現場で起きることを全て予測して、計画に盛り込むことはできません。むしろ、現場に起きる変化に柔軟に対応することができるようにすることの方が重要です。このことを痛切に感じたのは、高田先生にお誘いいただいて参加した堀川団地再生のプロジェクトでした。その後、2012年3月11日、東日本大震災から1年を迎える日に開催された研究会で高田先生が配られた資料の中で、「おお、これだ」と思った図がありました。この図では、回復力（レジリエンス）・冗長性（リダンダンシー）・多様性（ダイバーシティ）の3つが持続可能性を左右する、と曲線を使って解説されていました。この曲線を使う、というところでピンとききました。授業の設計を含めて、計画は直線的に考えられることが多い、ということです。ODAなどの国際協力ではロジックモデルと呼ばれる枠組みで計画・評価されます。適切なインプットからアウトプットを、それによって最大限のインパクトをもたらされるように、と考えるモデルです。ただ、これを授業に当てはめると、学生が地域にもたらすいい影響は、そううまくいきません。

そこで2016年に、高田先生の図を活用させていただきつつ、同僚の河井亨先生と「サービス・ラーニングにおける集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方」という論文を書きました。学生が何を学ぶかと、その活動を通じて現場に何をもちたらずかは区別しなければいけないので、「いいことをしている」ような雰囲気収めるのはやめましょう、と授業担当者などに提案したものです。

この論文では、高田先生の図解をロバート・シグモンという方による活動と学習の4つの型を重ね合わせました。4つの型というのは1994年に示されたもので、sL型はservice-LEARNINGとsが小文字になっていることから活動より学習目標達成に重きが置かれたもの、Sl型は逆のSERVICE-learningで大文字になった活動の成果が優先されるもの、またsl型はservice learningと活動の成果と学びの目標の達成が分離しているもの、そしてSL型はSERVICE-LEARNINGで活動と学習のバランスが整ったもの、とされています。

この4つの型を高田先生の整理を参考に図解すると、sl型という活動も学習も少ないバ

ーションには、「惰性的進行」と名付けました。単に流れのまま、変化に耐えられずに時間が来たらそこで終わりという状態のものです。実際に起きた事例では、ある自治体の広報誌作りのプロジェクトで、行政の論理も地域の日常も分かっていない受講生に「学生ならではの視点」で取材して記事をまとめることが期待されたものの、結果として十分な水準に達することができませんでした。ただし決して学生が未熟なわけではなかったものの、結局は回覧板で配布されていく各戸の反応を考慮した担当職員や地域のことを良く知る住民の方々が手を入れる箇所の方が多くなり、執筆した学生にも不全感が残ってしまったケースです。過剰な期待が学生のやる気を削ぐことは当初から懸念していたものの、ミスマッチが目立つプロジェクトとなってしまいました。

続いて「拘泥的進行」と名付けたのがSI型です。とにかく変化に耐えながら何とかやり遂げるもので、学生たちが「どうだ」とでも言わんばかりの活動重視型になるものです。京都の三大祭の1つ、時代祭でのプロジェクトでこの型になるときのことがあります。とにかく10月22日に本番がやってくるので、その日に合わせて駆け込みで企画を仕上げ、活動面では一定の水準に達します。しかし、その際に疲れ果てて学習成果を言語化する余裕があまりなく、何を学んだかは「いろいろ」と、言葉にならずに終わってしまうパターンです。

そして「回復的進行」と名付けたのがsL型です。これが高田先生のお示しの持続可能性のあるパターンです。活動面では反省の弁も多々あるものの、なぜうまくいかなかったかの背景が理解できていて、学びが多いプロジェクトです。学生の自主性を過度に重んじることなく、適度に教員や受入団体の皆さんが適度に介入できたときにもたらされる型と捉えており、その事例として福島県楡葉町での取り組みを紹介させていただきます。

楡葉町でのプロジェクトは2015年に始めたもので、現地での活動前日にあたる8月31日の京都新聞夕刊で大きく紹介いただきました。4年半ぶりに東日本大震災による原子力災害による避難指示が解除されるまちでのサービス・ラーニングとして、「町民がまちの未来を考えるきっかけづくり」となるよう、住民インタビューを「ならば31人の"生"の物語」としてポスターにまとめるというプロジェクトです。その後、9月4日にはフジテレビ系のFNNニュースで「“避難指示解除”前日の動き」というタイトルで報道いただきました。

#### —映像上映—

当時、「まいにち、修造！」という松岡修造さんの日めくりカレンダーがはやっていたので、それを作ろうと思って始めたのですが、結局A3判のポスターを作ることに変わりました。これは「ならば31人」という名称のとおり31人を取材してまとめれば、日替わりで事える、日めくりで替えられるカレンダーになると考えての活動でした。その理由は、避難指示が解除となっても全住民が帰るわけではなく、まちの風景があまり変わらないだろうと想像したためです。そこで、毎日公民館に張り出す、今日は何の日のようなカレンダー作りをしようと、立命館災害復興支援室と一般社団法人ならばみらいで協働しました。

具体的には、2人1組がペアで1時間のインタビューをさせていただき、どちらかがメインライターとして400字の物語まとめ、もう一方が補足して仕上げていく活動です。私は編集時の相談には乗るものの、ならばみらいのスタッフの方に内容のチェックお願いしています。1回の滞在で大体4人分のインタビューを行い、2022年度まで続いています。

このプロジェクトでは、授業としてのレポートは成績評価のために執筆してもらいますが、それとは別に、活動部分の振り返りの一環でインタビューした相手にお手紙を書いてもらっています。宛名があって、差出人がいて、それを届ける人がいる、実に原始的なコミュニケーションの方法なのですが、自分にとって1週間の滞在が何だったかを学生が言葉にすることで、教員による成績評価とは別の意味で実践としての意義が学生たちに腑に落ちることにもなっているようです。レポートなどからの推察ですが、何より現地の方々に喜んで受け取っていただけると、それが自身の至らなさにも誠実に向き合うきっかけにもなっているように伺えます。時には「また行きます」と手紙に書いたからと、実際、その後何回か足を運んでいる学生もいます。中には「なかなか行けないので」と、学園祭の模擬店で地域の特産品の汁物を出店した年もあります。

ポスターは2015年から毎年31人分セットが作られてきました。私はこれを地域の物語に「消印を押す」という比喻で語ってきています。原子力災害での避難がもたらした葛藤や軋轢がどういうものかを記録するという意味もあるのですが、それよりも取材に協力いただいた方に「このときの私はこうでした」と生の証を町の中で半ば公的に記録するという感じです。個別性の高い記録ですが、学生との対話を通じた物語によって、檜葉のこの年はこうだったと語り切らないまでも、集合的な記憶として残せていると思っています。

その後、2019年まで順調にやってきました。しかし、2019年から2020年になると新型コロナウイルス感染症の影響を受け、初年度から安定的に展開できるだけの手順を整えていたものの、継続が難しくなりました。2020年は完全にお休みで、2021年は、オンラインで何かできないかと探ったものの、結局、具体的な動きには至りませんでした。

2022年は何かしたいと思い、ならばみらいの皆さんとの事前の調整のもと、2015年の避難指示解除の際にお話を伺った方のその後を追いかけることにしました。というのも、2011年3月12日以降、4年半にわたって居住者ゼロになったという衝撃的な状態を知らない人も増え、既にその後生まれた人たちも7歳になること今、その子たちに生まれ育ったまちのことを伝えるということも意義があると考えたためです。プロジェクトに参加した学生は「お久しぶりです」とは言えない人がほとんどで、私だけ「お久しぶり」でした。ただ、私のことは「覚えていないな」という人も多く、それくらい学生たちが主役になっていた取り組みだったことが確認できました。

結果として「アフターストーリーズ」と名付け、7人の「今」を伺うことができました。自動車の整備士を引退した方、仮設住宅の世話人さんでご自宅に戻られて野菜作りを楽しんでおられる方、仮設住宅で使っていたベンチを今も復興住宅でお使いの方、変わらず趣味の詩吟を楽しんでいる方、檜葉以外に住むことを決断しつつ仕事は檜葉でされている方、食品の残留放射線量を検査していた後に安心な食材への関心のもとで農業をされている方、7年前には仮設の商店街だった場所で取材をさせていただいて時間の流れを思い起こされた方、住み慣れた檜葉を離れて一軒家を建てるにあたって好きな作家のイラストを購入しようと思立った方、など、それぞれの暮らしを語っていただきました。

居住者でどうしても檜葉の復興に対する思いはそれぞれに語られます。共通するのは復興とは元に戻すことではない、ということです。実際、「アフターストーリー」だけでなく「なら31人の"生"の物語」では、一人ひとりの選択はそれぞれで、家族の中でも意見が異なる場合もあり、その時の決断が最善だったかの迷いがあることが語られます。何より、

檜葉に戻らないという選択をすることが悪ではありません。ただし、檜葉に戻った人たちに対して地域にこだわっているという指摘や、ふるさとにこだわり過ぎだという批判、さらには何か金狙いではないかといった否定的な見方が示されることさえあります。この数年、檜葉に通う私には、そうした小さな声が大きな分断を生み出しているように思えてなりません。

ただし、そうして一人ひとりのあいだに分断があると語り切ってしまうことに、こうして個別の物語に着目する意義がある、と捉えています。何より遠方から来た学生たちには今後の人生を考えていく大きな学びが得られることは間違いないのですが、そうしてお話を伺う方々への敬意を払うことを忘れず、例えば「学生が何かさせてもらいます」という姿勢のもとで教育災害や学習災害がもたらされることのないように、これからも丁寧な関係構築に努めて行きたい、と言うのが私の姿勢です。

人生は決定論的にあらかじめ計画されたものではなく、また 400 字で人生の物語をまとめるにあたって効率よく計画的に取り組めば良い成果物を作ることができるわけではない、そうした人生設計と活動計画の両面から、ささやかな実践にあたってきています。そのため、学生らは取材させていただいた方々にお手紙を書き、そのお手紙と共に 400 字でまとめた「作品」をお届けさせていただいています。

土木計画から始まった私の関心は、こうして地域の未来について、地図上に平面的に写し取ることができる事柄だけではなく、見ている世界の中でも見えない側面、とりわけ人間関係を中心に扱うようになってきました。あえて二極化のもとで対置してみるなら量より質、ハードよりソフトを扱っていく上で、何か私にできないことがないかを探ってきています。そして、特に学生たちに何らかの活動の体験を通じて自分たちの生きる未来を考える場づくりを今、行っています。

その際に着目しているのが「分人」という言葉です。これは松永さんの話題提供の翌週、前田先生の授業でも使われていましたが、私は平野啓一郎さんの小説『空白を満たしなさい』で知りました。今は文庫にもまっていますが、単行本の 326 ページにこんな記述があります。「私たちは、その対人関係ごとの色んな自分を、＜個人＞に対して＜分人＞と呼んでいます。分数の分に人。個人が整数だとすれば、分人は分数のイメージです。個人は一人、二人と数える。その一人々々の中にまた、複数の違った分人が存在している。」というものです。つまり、人を個人という 1 の単位で見なくてもいいという解釈ができることになるでしょう。ここで以前、渥美先生が、先ほど触れた活動人口の概念について「障害のある人は 0.8 と捉えるか、多くの人の関わりを支援の必要性から呼びかけるために 1 以上の存在や役割があると捉えるか」という指摘をされていたことを紹介させてください。個人で捉えると欠損があると見立てられたとしても、他者とのあいだでは付加価値を持って 1 以上の力を持った人として位置づけられるのではないかと、というグループ・ダイナミックス的な観点です。

人間を整数ではなく分数で捉えるということは、1 人を 1 と数えるのではなく 1 を構成する成分に分解してみようという話です。小説では主人公は土屋徹生という人なのですが、人によって名字で呼んだり、名前で呼んだり、あるいは愛称で呼ばれる場合もあれば呼び名がわからないときには「あなた」と呼ばれるなど、人によって呼び方が個別にある、ということが個人の成分という比喩が成り立つ背景として説明されています。

私は「分人」という観点はまちの呼び名や単位に対しても適用できるのではないかと関心を向けています。京都というまちであれば、元学区での自治などが考えに近いかもしれませんが。そうして地域の呼び名が多様であるように、人もまた呼び名が多様であるように、その成分の組成は常に変わっていくものでしょう。今ここで話している私自身も、ちょっと真面目に話す私、何か面白い話をしなければと思う私、研究会だから理論的な話をしなければと思う私、と複数の成分があって、その比率は時間の流れと共に変わっています。本当の自分が一つの変わらぬものではないように、地域を構成する要素もまた多様であって然るべし、でしょう。

ですので、私は地域の物語を豊かにするためには、一人一人の人生の生き方をうまく言葉にしていくことが重要だと捉えて、各種の実践を仕掛けています。その際、地域の外から来た人と一緒に共に過ごしていく機会を設けることが鍵という思いを持っています。

そのため、学生が地域に関わっていくという学びのコミュニティづくりを通じて、地域コミュニティの側で「私でも何かできるかもしれない」や「こんな私の日常が誰かの何かの気付きになるかもしれない」という思いが駆り立てられるようなつなぎ役をさせてもらっているつもりです。計画というテーマに改めて引きつけるなら、時間は直線的かつ均等に流れるだけではなく、曲線的かつ時には一瞬でも長く感じる場合や長時間でも一瞬に感じる場合もあります。人生、山あり谷あり、しかもあるときは高い山や深い谷と思っていたことも、まだまだ高い山や深い谷もある、何より小さな坂がありつつも意外に平坦な台地だったこともある、そんなお話として捉えていただくと、何かひもといていただけたところがあるかもしれません。

—————ありがとうございました。質疑・意見交換はこの後の対話（2nd フレーム\_C）のセッションでお願いいたします。

※同ワーキング（2nd フレーム\_B）は、2023年1月7日（土）大阪ガスネットワーク都市魅力研究室にて行い、新川達郎、高田光雄、渥美公秀、山口洋典、川中大輔、前田昌弘、弘本由香里が参加した。